

完全合理性と限定合理性

Complete Rationality and Definitive Rationality

安平哲太郎*

Tetsutaro YASUHIRA

*産業技術総合研究所 Advanced Institution of Science and Technology

〒305-8561 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第 2 E-mail : t-yasuhira@aist.go.jp

概要

情報関連装置への入力以前の問題として、客観的世界に働いている完全合理性とそれを認識する人間の限定合理性との関係を議論する。完全合理性は人間が認識するという立場からは、「2 つの対象を人間がある観点から見た時に、本来同じと認識すべき事、異なると認識すべき事」と表現できる。これは、同時点の別の 2 つの対象や、ある時点での対象と経時変化を経た後の同じ対象との間で成立し、異なり方は部分と全体の間で、さらに、経時変化を経る間に外部から働く作用と部分あるいは全体との間で一対一対応である。一方、人間の認識は不完全であり、それ故に限定合理性といわれる。このうち、特に異なると認識できていない時、対立や矛盾が生ずる事をパラドックスを用いて明らかにする。そして、この限定合理性を完全合理性に近づけてゆくためには、部分と全体との関係について問題意識を持つ事が重要で、これが概念分析の本質であることを示す。

As one of problems before input into information- related-devices, there is the relation between a complete rationality working at the objective world and a definitive rationality of human recognizing it. The rationality working objectively can be expressed as what human had better originally recognize as a same or as a different when he observes two objects if we express it from a point of view he recognizes. This is true between two other objects at the same time or between one object at one time and the same object after some time passed and the difference is one to one between a part and a whole at the same time and before and after some time passes it is one to one between the operation working from outer and a part or a whole. On the other hand, because recognition of human is incomplete, he haven't been able to recognize as a same or a different. This is called as the definitive rationality. We make it clear that he feels opposition and contradiction when he cann't recognize as a different what he should recognize originally as a different. In order to approach this definitive rationality to the complete rationality, it is important to have the awareness of the issues and this is the essence of the concept analysis.

キーワード：完全合理性、限定合理性、矛盾、パラドックスの解消、概念分析

Complete rationality, Definitive rationality, Contradiction, Resolution of paradox, Concept analysis

1 はじめに

根岸正光会長¹⁾が米田幸夫初代会長の言葉「入力以前の問題」を引用して、コンテンツ（内容）が情報知識学においては本質的に重要であり、古くて新しい問題であることを指摘している。そこで、ここでは、入力以前の、そして、情報知識の内容に関する問題として合理性を取り上げることとする。

合理主義という言葉をもとに万有国民百科事典で調べてみると、「非合理、偶然的なものを排し、理性的、論理的、必然的なものを尊重する立場」とある。そこで、次に理性を調べてみると、「物事を正しく判断する力。また、真と偽、善と悪を識別する能力。ときには美と醜を識別する働きまで理性に帰せられることがある。」とある。したがって、まず、理性は基本的には、真という視点から見て真に属するか属さないか、善という視点から見て善に属するか属さないかという具合に、客観的世界を認識においてある視点から見て同じか異なるかという区別をする事だと考えられる。したがって、理性的というのは客観的世界を本来認識されるべき状態として好悪の感情を離れて冷静に異種混合を排して認識する事だと考えられるし、論理的というのは異種混合を排して表現する事だと考えられる。そしてまた、必然的というのは一つの原因に対して一つの結果が対応することであると考えられる。そうすると、合理主義という

のは「客観的世界の認識や表現において異種混合を排し、一対一対応の因果関係を尊重する立場」と考える事が出来る。一方、表現もまた、表現者の認識の投影である事を考えると、結局、認識において異種混合を排するという観点から合理性を考える事が出来るのではないかと思われる。そこで、以下、この観点から合理性を検討してゆく事にする。

2 合理性とは

合理性とは、上記の検討から基本的には人間の認識における異種混合を排除することを尊重する立場だと考えられる。しかし、認識がまずは客観的世界をあるがままに区別して受け止める事だとするならば、我々の認識を離れた客観的世界の構造がそうになっているという仮説が存在している事になる。そこで、その仮説を人間の認識という観点から表現してみる事にする。

この時、客観的世界に同時に存在する2つの個別の対象と、1つの対象と、それが経時変化を経た後の対象との2つの場合が考えられる。

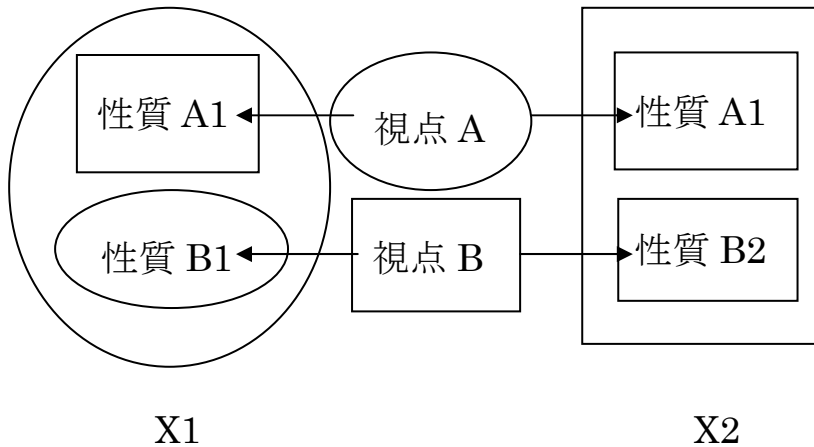
I. 同時に存在する2つの個別の対象に対して、

- (1) 2つの対象がどの視点から見ても、本来全く同一の性質および関係を持つと認識すべき時、その2つの対象は同一である。
- (2) 2つの対象がある視点から見て、

本来共通する性質および関係を持つ部分と、別の視点から見て異なる性質および関係を持つ部分とがあると認識すべき時、その2つの対象は異なっており、したがって、必然的に部分の異なり方と全体の異なり方は1対1対応である（図

1）。この「認識すべき状態」が客観的に働いている合理性であり、これは我々人間の認識の不完全さには依存しないので完全合理性という事にする。

図1. ある2つの対象がある視点から見て同一であると認識すべき性質の部分と別の視点から見て異なると認識すべき性質の部分とに分けられる時、その2つの対象は異なっていると認識しなければならない。

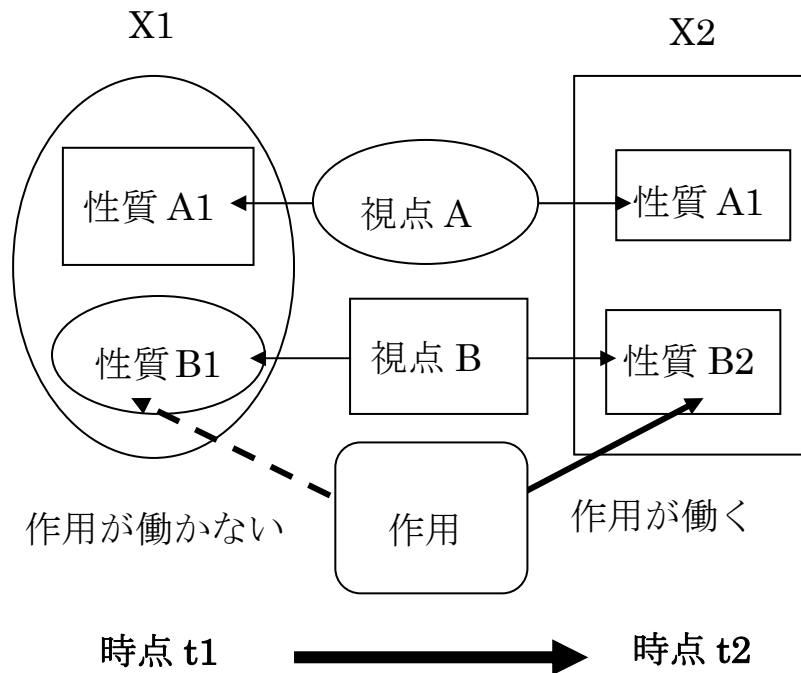


II. 1つの対象の経時変化による状態変化に対して、

- (1) 1つの対象が時間経過を経ても、どの視点から見ても全く同一の性質および関係をもつと認識すべき時、外部から何らの作用がなかったと考え、同じ対象と考える。
- (2) 1つの対象が時間経過を経た時、

初期状態とは異なる対象となったと認識すべき時、その間に外部から何らかの作用があったと考える。したがって、必然的に外部からの作用の異なり方と作用が働いた部分および全体の異なり方とは1対1対応である。（図2）

図2. 1つの対象が、経時変化を経て、異なると認識すべき対象となるなら、ある視点から見て同一と認識すべき性質の部分と、その間に外部から作用を受けて、別の視点から見て異なると認識すべき性質の部分とがある。



以上、説明した合理性は、我々人間の主観を離れた客観的世界で働いている完全な合理性を、我々人間が認識するという立場から記述したものである。それに対して、それを認識する我々人間の認識は不完全であるから、同じ時点の2つの対象、あるいは、異なる時点の一つの対象の視点Aから見た部分的な性質の類似性A1や視点Bから見た部分的な性質の相違性B1、B2を認識できていない事があ

る。そのような我々の認識の不完全性による合理性を限定合理性とっている。ここでは、2つの命題に対してある観点から同じであるべきものを同じとみていて、かつ、別の観点から本来異なるべきものを区別出来ずに同じとみている時、そして、その観点さえ意識していない時、どういう事が起きるか2つのパラドックスを用いて検討する。

3 矛盾の本質とその解決

ここでは、我々が矛盾を感じる時の表現と認識の構造を説明し、その表現では記述されていない視点を導入する事によって矛盾を解決できる事を明らかにする。そこで、まず、パラドックスと言われている表現を分析して共通の性質を見出し（これは客観的に認める事が出来るものである。）、つぎに、この共通の性質をすべて満足するように、すなわち、騙されるところは騙され、認識すべきところは認識したらどのように感じるかを考えていく事にする。具体例としてゼノンの「英雄アキレスと亀の競走」²⁾と韓非子の故事「矛と楯」というパラドックスを取り上げる。

本題に入る前に、本論文を理解するために必要な程度 of 言葉の定義を簡単にしておきたい。まず、表現とは、表現の読み手がある意味を認識する事を表現者の意図としてあらわした文章という事にする。また、意味とは、言語表現された「ある対象に関連して考えた方がよい事」、「ある対象に関連して考えるべき事」と定義する。そうすれば、意味を、客観的に存在している対象を考えた時、その対象をある観点から見て価値判断した性質と考える事も出来る。したがって、様々な観点から対象を見て価値判断した性質の集合がある対象に対するコンテンツということになる。すなわち、コンテンツはその対象に付与された様々な意味の集合である。そして、客観的に存在する対象として表現を考えた

時、表現者の意図という観点から判断した意味を考えることができる。したがって、表現Aに対して表現者の意図通りの意味「A」を意図通りの意味という事にする。そして、この意味が現実により得る時、現実的意味といい、現実により得ないとき、空想的意味という事にする。そして、この意味を構成する単位を概念という事にする。また、1つの命題は、1つの完結された表現であるが、それを構成する部分を部分表現という事にする。

3.1 人間に矛盾を感じさせる表現の構造

- (1) ある視点から見た具体的性質を無視して記述されている部分表現A
- (2) もし、部分表現Bが現実的意味を持つなら、その視点に関して具体的性質が表現Aとは異ならなければならない事を無視して記述されている部分表現B
- (3) 部分表現Aと部分表現Bにおける異なる具体的性質を記述しない事によって、部分表現Aと同一の性質であるかの様に錯覚させ現実により得ない意味にしておきながら、なおかつ部分表現Aの意図通りの意味と部分表現Bの意図通りの意味とが現実により両立していると認識せざるを得ない構造

例) 部分表現Aと部分表現Bとが前提—結論、原因—結果、一様な連続な図形などとして表現される。

以下に上の各性質について、具体例で見えてゆく。

具体例 英雄アキレスと亀の競走

アキレスと亀とが競走する。アキレスは有名な俊足の持ち主であるから、ハンディキャップをつけて、亀より後の位置から同時に出発する。さて、アキレスが亀を追い越すためには、まず、亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。アキレスが亀の地点に到達するたびに、いつでも亀は少し先に進んでいる。だから、アキレスは、いつまでたっても亀に追いつけない。アキレスがいくら早く走っても無駄であるし、亀はいくら遅くとも、休まずに進み続ける限り、決して追いつかれることはない。

(0) 視点となっている現実の性質

アキレスの歩幅

(1) 具体的性質を無視して記述されている部分表現A、(以下[]内は無視している具体的性質)

アキレスが亀を追い越すためには、まず、[一定の歩幅で]亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。

(2) もし、部分表現Bが現実的意味を持つなら、その視点に関して具体的性質が部分表現Aとは異なる事を無視

して記述されている部分表現B (以下[]内は無視している具体的性質)

[アキレスと亀の距離がアキレスの歩幅に等しくなってからアキレスの歩幅をだんだん狭めて]アキレスが亀の地点に到達するたびに、いつでも亀は少し先に進んでいる。

(3) 部分表現Aと部分表現Bにおける異なる具体的性質を記述しない事によって、部分表現Aと同一の性質であるかのように錯覚させ現実であり得ない意味にしておきながら、なおかつ部分表現Aの意図通りの意味と部分表現Bの意図通りの意味とが現実に両立していると認識せざるを得ない構造

部分表現Aと部分表現Bとがそれぞれ現実的意味を持つためにはアキレスと亀の距離がアキレスの歩幅に等しくなってからアキレスの歩幅が狭まる必要があるにもかかわらずそれを記述せず、いつでも同じ歩幅でアキレスが亀の地点に到達する事が可能であるかのように記述している。また、「競走する」とか「俊足の持ち主」、「するたびに、いつでも」「亀に追いつけない」、「いくら早く走っても」という表現を用いたりして歩幅が変わっていないという印象、さらに「A」と継続した時間上にあり、従って原因に対する結果という印象を強めている。そして、「亀はいくら遅くとも、休まずに進み続ける限り」という表現を用いることによってアキレスの歩幅に関心が行かないようにしている。

具体例 矛と楯

どの楯をも貫き通す矛とどの矛をも通させない楯がある。この矛と楯とが戦ったらどうなるか。

(0) 視点となっている現実の性質

矛と楯が存在する時間範囲

(1) 具体的性質を無視して記述されている部分表現A (以下[]内は無視している具体的性質)

[ある時間範囲で] どの楯をも貫き通す矛がある。

(2) もし、部分表現Bが現実的意味を持つなら、その視点に関して具体的性質が部分表現Aとは異なることを無視して記述されている部分表現B (以下[]内は無視している具体的性質) [それとは異なる時間範囲で] どの矛をも通させない楯がある。

(3) 部分表現Aと部分表現Bにおける異なる具体的性質を記述しない事によって、部分表現Aと同一の性質であるかのように錯覚させ現実であり得ない意味にしておきながら、なおかつ部分表現Aの意図通りの意味と部分表現Bの意図通りの意味とが現実にも両立していると認識せざるを得ない構造

現実であり得るなら時間範囲が異ならなければならない事を記述せず、且つ、「と」と言う並置を用いたり、「とが戦ったら」という言葉を用いたりして、同時には存在し得ない事象が同時に存在し得ているかのように錯覚させている。

3.2 人間に矛盾を感じさせる認識の構造

(1) 3.1 「人間に矛盾を感じさせる表現の構造」の(3)によって指定されている関係の為に、部分表現Aと部分表現Bとで具体的性質が変わらなければ現実にはあり得ないにもかかわらず、具体的性質が変わらないと錯覚したまま現実であり得るような感じがすると共に、

(2) 3.1 「人間に矛盾を感じさせる表現の構造」の(3)によって指定されている関係に対して、経験より部分表現Aより実際に具体的性質が変わらない時に現実にも成立し得る意味 not 「B」が潜在意識下で誘起され、現実であると錯覚している意図通りの空想的意味「B」と経験による現実的意味 not 「B」とが重なって違和感を感じず。

(3) 意味「B」と意味 not 「B」とも(1)、(2)の関係より現実でなければならぬと思っているにもかかわらず、現実には両立し得ない事も認識しているから、違和感を解消しなければならないと思う。

(4) そこで今度は、その違和感を解消しようとして部分表現Bに対して部分表現Aが現実にも成立するかどうか見ようとする、

(5) 「人間に矛盾を感じさせる文章の構造」の(3)によって指定されている関係に対して、経験より部分表現Bより実際に具体的性質が変わらない時に現実にも成立し得る意味

not「A」が潜在意識下で誘起され現実であると錯覚している意図通りの空想的意味「A」と経験による現実的意味 not「A」とが重なって違和感を感じず。

- (6) 意味「A」と意味 not「A」とも(4)、(5)の関係より現実でなければならぬと思っているにもかかわらず、現実には両立し得ない事も認識しているから、違和感を解消しなければならぬと思う。

以下(1)から繰り返す。

パラドックスによっては、(3)で(1)へ戻るパラドックスもある。このアキレスと亀の競走の場合がそうである。

以下に、上の各性質について具体例でみてゆく。

具体例 英雄アキレスと亀の競走

- (1) 3.1「人間に矛盾を感じさせる表現の構造」の(3)によって指定されている関係の為に、部分表現Aと部分表現Bとがアキレスの歩幅という視点に関して具体的性質が変わらなければ現実にはあり得ないにもかかわらず、具体的性質が変わらぬと錯覚したまま現実にはあり得るような感じがすると共に、
(以下[]内は意識していない)

部分表現A：

アキレスと亀とが競走する。アキレスは有名な俊足の持ち主であるから、ハンディキャップをつけて、亀より後の位置から同時に出発する。さて、アキレスが亀を追い越すため

には、まず、[一定の歩幅で]亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。

部分表現B：

[アキレスと亀の距離がアキレスの歩幅に等しくなっても一定の歩幅で]アキレスが亀の地点に到達するたびに、いつでも亀は少し先に進んでいる。だから、アキレスは、いつまでたっても亀に追いつけない。

- (2) 3.1「人間に矛盾を感じさせる表現の構造」の(3)によって指定されている関係に対して、経験より部分表現Aより実際に具体的性質が変わらない時に現実には成立し得る意味 not「B」が潜在意識下で誘起され現実であると錯覚している意図通りの空想的意味「B」と経験による現実的意味 not「B」とが重なって違和感を感じず。(以下[]内は意識していない)

文章から現実にはあり得ると錯覚させられている空想的意味：

亀より後の位置から同時に出発する。さて、アキレスが亀を追い越すためには、まず、[一定の歩幅で]亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。(意図通りの現実的意味「A」)

[アキレスと亀の距離がアキレスの歩幅に等しくなっても一定の歩幅で]アキレスが亀の地点に到達するたびに、いつでも亀は少し先に進んでいる。だから、アキレスは、いつまでたっても亀に追いつけない。(意図通りの空想的意味「B」)

経験による現実的意味：

亀より後の位置から同時に出発する。さてアキレスが亀を追い越すためには、まず、[一定の歩幅で]亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには亀はさらに先の地点にいる。(意図通りの現実的意味「A」)

→それでもいずれは[一定の歩幅で]アキレスは亀を追い越すはず。

(経験による意図から離れた現実的意味 not「B」)

(3) 意味「B」と意味 not「B」とも(1)、(2)の関係より現実でなければならぬと思っているにもかかわらず、現実には両立し得ない事も認識しているから、違和感を解消しなければならないと思う。

具体例 矛と楯

(1) 3.1「人間に矛盾を感じさせる文章の一般的構造」の(3)によって指定されている関係の為に、矛と楯が存在する時間範囲という視点の存在とその視点に変化しているこ

とを気づかせずに、部分表現Aと共に部分表現Bが現実成立するような感じがすると共に、(以下[]内は意識していない)

部分表現A：

【ある時間範囲に】どの楯をも貫き通す矛

部分表現B：

と【その同じ時間範囲に】どの矛をも通させない楯がある。

(2) 「人間に矛盾を感じさせる文章の一般的構造」の(3)によって指定されている関係に対して、経験により意図通りの現実的意味「A」より意図とは離れた現実的意味 not「B」が潜在意識化で誘起され、意図通りの空想的意味「B」と意図から離れた現実的意味 not「B」とが重なって違和感を感じず。(以下[]内は意識していない)

文章から現実でありうると錯覚させられている空想的意味：

【ある時間範囲に】どの楯をも貫き通す矛と(意図通りの現実的意味「A」)

【その同じ時間範囲に】どの矛をも通させない楯がある(意図通りの空想的意味「B」)

経験に基づく現実的意味：

【ある時間範囲に】どの楯をも貫き通す矛があるから(意図通りの現実的意味「A」)

【その同じ時間範囲に】どの矛をも通させない楯はない。(経験による意図

から離れた現実的意味 not 「B」)

(3) 意味「B」と意味 not 「B」とも (1)、(2)の関係より現実でなければならぬと思っているにもかかわらず、現実には両立し得ない事も認識しているから、違和感を解消しなければならぬと思う。

(4)そこで今度は、その違和感を解消しようとして「B」に対して「A」が現実成立するかどうか見ようとする、

どの矛をも通させない楯（「B」）とどの楯をも貫き通す矛（「A」）とがある。

(5)「人間に矛盾を感じさせる文章の一般的構造」の(3)によって指定されている関係の中で、現実の「B」より現実成立する not 「A」が潜在意識化で誘起され、「A」と not 「A」とが重なって違和感を感ずる。

文章から現実でありうると錯覚させられている空想的意味：

【ある時間範囲に】どの矛をも通させない楯（「B」）と、【その同じ時間範囲に】どの楯をも貫き通す矛とがある。（「A」）

経験に基づく現実的意味：

【ある時間範囲に】どの矛をも通させない楯がある（「B」）から、【その同じ時間範囲に】どの楯をも貫き通す矛はない。（not 「A」）

(6) 意味「A」と意味 not 「A」とも (4)、(5)の関係より現実でなければならぬと思っているにもかかわらず、現実には両立し得ない事も認識しているから、違和感を解消しなければならぬと思う。

以下 (1) から繰り返す

3.3 矛盾の解消

(1) 同じでなければならぬはずと感ずっている2つの命題、意図通りの現実的意味「A」→意図通りの空想的意味「B」と、意図通りの現実的意味「A」→経験による意図から離れた現実的意味 not 「B」とを個別に意識する。

(2) 意図通りの現実的意味「A」→意図通りの空想的意味「B」を文章から直接感ずる空想的意味、意図通りの現実的意味「A」→経験による意図から離れた現実的意味 not 「B」を経験から感ずる現実的意味とみなす。

(3) 現実的意味「A」が共通であるが為に本来同じでなければならぬと感ずっているこれら2つの意味を区別するために、意図通りの現実的意味「A」と意図通りの空想的意味「B」に関してそれぞれが別々に現実成立するとすればどのような性質を現実から見落としているかを考える。

以下に、上の各性質について、具体例でみてゆく。

具体例 アキレスと亀の競走

- (1) 同じでなければならぬと感じている2つの命題、意図通りの現実的意味「A」→意図通りの空想的意味「B」と意図通りの現実的意味「A」→経験による意図から離れた現実的意味 not「B」とを個別に意識する。([]内は意識していない)

現実にあろうと錯覚させられている空想的意味：

亀より後の位置から同時に出発する。さて、アキレスが亀を追い越すためには、まず、[一定の歩幅で] 亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。(意図通りの現実的意味「A」)
[アキレスと亀の距離がアキレスの歩幅に等しくなっても一定の歩幅で]アキレスが亀の地点に到達するたびに、いつでも亀は少し先に進んでいる。だから、アキレスは、いつまでたっても亀に追いつけない。(意図通りの空想的意味「B」)

経験による現実的意味：

亀より後の位置から同時に出発する。さてアキレスが亀を追い越すためには、まず、[一定の歩幅で] 亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にい

る。(意図通りの現実的意味「A」)
→いずれはアキレスは[一定の歩幅で] 亀を追い越すはず。(経験による意図から離れた現実的意味 not「B」)

- (2) 意図通りの現実的意味「A」→意図通りの空想的意味「B」を文章から直接感ずる意図通りの空想的意味、現実的意味「A」→現実的意味 not「B」を経験から感ずる現実的意味とみなす。(以下 [] 内は意識していない)

文章から直接感ずる意図通りの空想的意味とみなす：

亀より後の位置から同時に出発する。さてアキレスが亀を追い越すためには、まず、[一定の歩幅で] 亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。(意図通りの現実的意味「A」)
[アキレスと亀の距離がアキレスの歩幅に等しくなっても一定の歩幅で]アキレスが亀の地点に到達するたびに、いつでも亀は少し先に進んでいる。だから、アキレスは、いつまでたっても亀に追いつけない。(意図通りの空想的意味「B」)

経験による現実的意味：

[一定の歩幅で] 亀より後の位置から同時に出発する。さて、アキレスが亀を追い越すためには、まず、亀の出発点に立たなければならない。しかし、

その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。(意図通りの現実的意味「A」)
→それでも経験からいずれはアキレスは[一定の歩幅で]亀を追い越すはず。(経験による現実的意味not「B」)

(3) 命題「A」が共通であるが為に本来同じでなければならないと感じているこれら2つの命題を区別するために、意味「A」と「B」に関してそれぞれが現実成立するとすればどのような具体的性質を現実から見落としているかを考える。(太字斜体部は意識している)

空想的意味に関して、太字斜体部のように視点を修正すれば、現実に在り得る：

アキレスが亀を追い越すためには、まず、**一定の歩幅**で亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。(意図通りの現実的意味「A」)
そして、アキレスと亀の**距離がアキレスの歩幅に等しくなるぐらいからアキレスの歩幅をだんだん狭めてゆけば**アキレスが亀の地点に到達するたびに、いつでも亀は少し先に進んでいる。だから、アキレスはいつまでたっても亀に追いつけない。(意図とは離れた現実的意味「B'」)

経験による現実的意味：

アキレスが亀を追い越すためには、まず、**一定の歩幅**で亀の出発点に立たなければならない。しかし、その時は、亀はもっと先の地点にいる。そして、アキレスがその地点に到達したときには、亀はさらに先の地点にいる。(意図通りの現実的意味「A」)

そして、アキレスと亀の**距離がアキレスの歩幅に等しくなるぐらいからでもアキレスの歩幅が変わらなければ**、アキレスは亀を追い越す。(経験による現実的意味 not 「B」)

以上の議論から分かるとおりアキレスの歩幅(という視点)に関して、歩幅は変わらないことを強く印象付けて、しかも、その事を意識させないようにしながら、実際には「A」と「B」とで歩幅を変えた議論を進め、しかもそれが、それなりに実現可能なものだから、経験から生ずる歩幅は変わらないとした場合の結論との間で矛盾を感じるのである。

具体例 矛盾

(1) 同じでなければならないはずと感じている2つの命題、
意図通りの現実的意味「A」→意図通りの空想的意味「B」と
意図通りの現実的意味「A」→経験による意図から離れた現実的意味 not 「B」とを個別に意識する。
現実であり得ると錯覚させられている空想的意味：

【ある時間範囲に】どの楯をも貫き通

す矛盾がある。(意図通りの現実的意味「A」)

そして【同じ時間範囲に】どの矛盾をも通させない楯がある。(意図通りの空想的意味「B」)

経験に基づく現実的意味：

【ある時間範囲に】どの楯をも貫き通す矛盾がある。(意図通りの現実的意味「A」)

そして【同じ時間範囲に】どの矛盾をも通させない楯はない。(経験による意図から離れた現実的意味 not 「B」)

(2) 意図通りの現実的意味「A」→意図通りの空想的意味「B」を文章から直接感ずる意図通りの空想的意味、「A」→not「B」を経験から感ずる現実的意味とみなす。

文章から直接感ずる意図通りの空想的意味とみなす：

【ある時間範囲に】どの楯をも貫き通す矛盾がある。(意図通りの現実的意味「A」)

そして【同じ時間範囲に】どの矛盾をも通させない楯がある。(意図通りの空想的意味「B」)

経験に基づく現実的意味：

【ある時間範囲に】どの楯をも貫き通す矛盾がある。(意図通りの現実的意味「A」)

そして、【同じ時間範囲に】どの矛盾をも通させない楯はない。(経験による現実的意味 not 「B」)

(3) 命題「A」が共通であるが為に本

来同じでなければならぬと感じているこれら2つの命題を区別するために、意味「A」と「B」に関してどのような具体的性質を現実から見落としているかを考える。

空想的意味に関して、太字斜体部のように視点を修正すれば、現実^に在り得る：

ある時間範囲にどの楯をも貫き通す矛盾がある。(意図通りの現実的意味「A」)

そしてそれは異なる時間範囲にどの矛盾をも通させない楯がある。(意図とは離れた現実的意味「B」)

経験に基づく現実的意味：

ある時間範囲にどの楯をも貫き通す矛盾がある。(意図通りの現実的意味「A」)

そしてその同じ時間範囲にどの矛盾をも通させない楯はない。(経験による現実的意味 not 「B」)

すなわち、矛盾と楯とが属する時間範囲が「A」と「B」とで異なるのである。そしてそのことが文章の中で記述されていず、さらに時間範囲に関し異なっていないかのように錯覚させる記述があるために現実の経験との間に対立を感じるのである。

以上で、本来異なると認識すべき事を認識できていないことによって矛盾や対立が起きる事を説明した。一方、この事は同じとみなす事が前提である事は極めて重要である。

すなわち、アキレスと亀の競争において追い抜けない場合、アキレスが亀に追いついてからも同じ競争と考えているから矛盾となるのである。もし、追いついてからは競争をやめ、違う追い越さない歩き方に変えたと考えると矛盾しなくなるのである。例え、表現ではそう主張していなくても。また、矛と楯の場合も、どの楯をも貫く矛の場合と、どの矛をも通させない楯の場合も同じ矛と楯と考えるから対立するのである。もし、違うグループの話と考えた場合には、対立しなくなるのである。すなわち、矛盾や対立は、「同じ」と認識することが前提であり、その上で「本来異なる」と認識すべきところを認識していない事によって生じるのである。したがって、「同じ」と認識していなければ、表現はおかしくても矛盾や対立さえ起きないし、矛盾や対立は、「同じ」と認識したうえで「本来異なると認識すべきところ」をそう認識していないことに対する警鐘と考えられるのである。

この事は、人類史を考えてみればよく分かる。すなわち、奴隷制が存在し得たのは、奴隷である人たちを自分と同じ人間とみなさないことによって当然の事として存在し得たと考えられる。それに対して、奴隷を「同じ人間とみなす」（あるいは奴隷自身が「同じ人間だ」と考える）ようになって矛盾や対立が現れ、境遇の相違が意識・克服（すなわち、奴隷からの解放を求めて）され奴隷制の廃止に至ったと考えられるのである。また、一部の人間、

すなわち、国王に主権があり、他の人たちに主権がない事を当然の事として、国王の主権による支配下で民が生存する時代があり得たと思われる。それに対して全ての人たちに「同じように主権がある」とみる事が出来るようになって同じく矛盾や対立が現れ境遇の相違が意識・克服（すなわち、自由や平等を求めて）され主権在民の時代になったと考えられるのである。この矛盾や対立が現れてきた状況と境遇の相違が意識・克服される状況とは、日本の明治維新においてより明確に見る事が出来るように思われる。すなわち、幕末から明治維新への変革のエネルギーは寺子屋や藩校等の教育の普及により同じ能力を意識し始めた人たち（特に下級武士）の身分制に対する反発であり、勝海舟、福沢諭吉らによる咸臨丸での渡米、岩倉具視らによる米欧視察などによってはじめて、自由、民権と平等という日本と欧米の体制の違い、あるいは変革の行くつく先を明確に意識し、それ以降その方向へ向かったと考えられる。

4 矛盾、対立の解消と概念分析³⁾

以上、考察してきたように、人間が感じている意味には、本来、同じとみなすべき事を同じとし、異なるとみなすべき事を異なるとした完全合理的な意味と、そうみなしていない限定合理的な意味とがある事が分かった。ここでは、この限定合理性を完全合理性に近づけてゆくためには概念分析が有効であることを示す。

概念分析とは基本的には以下の2つの操作を意味する。

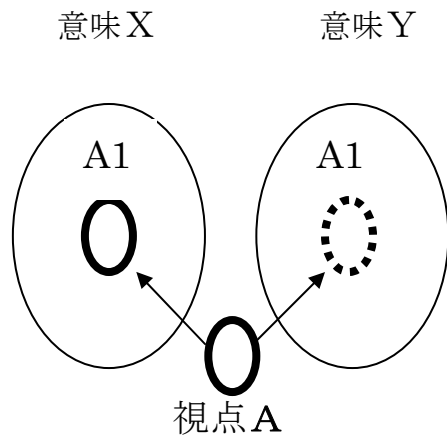
- a. ある意味Xに関して視点AからA1という性質をみつけたら、ある意味Xに類似した別の意味Yに当てはめA1に相当する性質を発見する事である。
- b. ある意味Xに対して性質A1が共通していて全体としては意味Xと異なる別の意味Zと比較し、ある

視点Bから見て異なる性質B1とB2とを発見する事である。

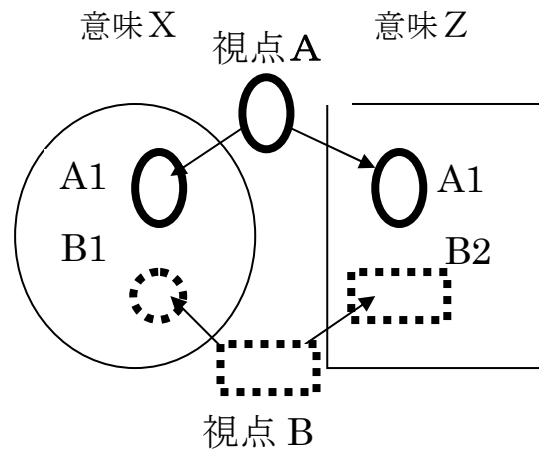
したがって、この操作は基本的には「意味XにA1という性質があるなら、それに類似した別の意味YにおけるA1に相当する性質は何か」、「意味Xとそれとは異なる別の意味ZにおいてA1が共通しているとき、何が異なるのか。」という問題意識を持つ事なのである。この関係を図3に示す。

図3.

(1) 意味Xと類似した意味Yに対して意味Xに視点Aに相当する性質A1があるから意味Yにも類似した性質A1があると考える。



(2) 意味Xと相違した意味Zに対して視点Aに相当する性質A1が共通であるから、視点Bに相当する異なる性質B1とB2があると考える。



アキレスと亀の競争では、意味Xがアキレスと亀が競争をして、アキレスがカメを追い抜くという命題であり、意味Zがアキレスと亀が競争をして、アキレスがカメを追い抜けないという命題に相当し、両命題は異なる。それに対して、競争という視点Aから見てアキレスと亀が競争している事は同じA1である。そこで、共通の性質A

1を持つのに、両命題XとZが異なるからには異なる性質がある筈、それは何かという問題意識を持つ事によって、その結果、歩幅という視点Bから見て、命題Xでは「歩幅を縮めない」という性質B1を持ち、命題Zでは「アキレスがカメに追いついてから歩幅を縮める」という異なる性質B2を持っている事が分かる。

また、矛と盾では、意味Xがどの盾をも貫き通す矛があつて、どの矛をも貫き通させない盾はないという命題であり、意味Zがどの盾をも貫き通す矛とどの矛をも貫き通させない盾があるという命題に相当し両命題は異なる。それに対して、矛と盾という視点Aから見て、ある時点で存在しているすべての矛と盾を対象にしている事は同じA1である。そこで、共通の性質A1を持つのに、両命題XとZが異なるからには異なる性質がある筈、それは何かという問題意識を持つことによって、その結果、存在する時間範囲という視点Bから見て、命題Xでは「ある時間範囲」という性質B1を持ち、命題Zでは「どの矛をも貫き通させない盾があるのはそれとは異なる時間範囲」という異なる性質B2を持っている事が分かるのである。この様にして、概念分析によって問題意識を持つことにより、我々の認識の限定合理的状態を完全合理的な状態へと整理してゆく事が出来るのである。

5 まとめ

客観的世界には、本来、人間がある観点から見て、同じ、あるいは、異なるとして認識しなければならない区別がある事を示し、それを完全合理性とした。そして、それは、同じ時点に存在する2つの対象、あるいは、1つの対象とそれが経時変化を経た後の対象との間で成立しなければならないことを明らかにした。そして、経時変化をする前と後の対象が異なる場

合は、外部からの作用によってその対象の部分が異なることを明らかにした。さらに、同じ時点の異なる2つの対象、外部から作用を受ける前後の異なる対象との間では、作用と部分の相違との関係、部分の相違と全体の相違との関係は、一対一対応であることを明らかにした。

一方、人間の認識は不完全であり、本来同じとみなすべき2つの性質を同じとみなしていない、あるいは区別していなければならない異なる性質を区別し得ていないことがあることを示し、同じとみなしていない場合は矛盾や対立さえ生じない、そして、同じとみなしていても異なるとみなすべきところをそうみなしていない場合は矛盾や対立となって現れる事を明らかにした。

そして、このような矛盾、対立を解消するためには、問題意識を持つことが必要で、その事によって本来異なる性質を区別して認識出来るようになり、矛盾や対立を解消出来る事を示した。そして、このような問題意識を自ら作り出す手法を概念分析とした。

さらに、実際に重要なのは、このような作為的な文章によって作られる矛盾や対立ではなく、現実により新しい視点が必要となってきた時にその視点を取り入れていない事によって生ずる矛盾や対立とその解消と考えられる。例えば、環境保全が必要となってきた時に、それを取り入れていない産業活動と環境保全は対立するが、環境保全を考慮した産業活動へと変

化する事によって、環境保全とは対立しなくなる⁴⁾。

最後に、「本来、同じとみなすべき、異なるとみなすべき」とは何かという点について簡単に触れておきたい。これは、そう認識して現実に働きかけた結果、何らかの有意な効果を得る事が出来る物の見方とっていいのではないかと思う。

謝辞

定年となりシニヤスタッフとして研究支援にまわりながらこの研究を行うためには、私の所属する第2事業所 研究業務推進室の理解と協力が必要であった。ここに岡野室長、池津室

長代理始め業務室の職員、シニヤスタッフ、秘書の皆さんに心から御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 根岸正光：会長就任にあたって、『情報知識学会誌』， Vol. 18, No. 3, pp. 219, 2008.
- [2] 安平哲太郎：「概念分析」， 初版，文芸社， pp. 39-pp. 51, 2004.
- [3] 安平哲太郎：「概念分析」， 初版，文芸社， pp. 67-pp. 83, 2004.
- [4] 安平哲太郎他：「歴史から洞察される判断基準としての観点」， 情報知識学会誌， Vol. 16, No. 2, pp. 75, 2006.